

湖東・伊吹山・醒ヶ井を巡る産業

1. 醒ヶ井養鱒場

琵琶湖・湖東エクスカージョンは湧水を観光資源にうまく取り入れた醒ヶ井、湧水で養殖に取り組む県の「醒ヶ井養鱒場」、伊吹山の薬草を産業に結びつける「薬草の里文化センター」の見学です。

JR 醒ヶ井駅から徒歩 10 分のところに中山道の醒ヶ井宿、「醒ヶ井湧くわく街道」があります。入り口にある「居醒（いざめ）の清水」は平成の名水百選第 1 位に選ばれており、こんこんと清らかな水がわき出て、ここから地蔵川が始まります。こんなに清らかな流れが身近にあったことに驚きです。すぐ南側上を名神高速道路が走っているのが不思議です。清流の木陰にハリヨの入った水槽と説明文が置かれており、ハリヨは絶滅危惧 1 A 類に指定されている小魚で、地域ぐるみで大切に守られていることが伺えます。ハリヨは年間を通して 15℃以下の湧水に住み、ここと岐阜県の一部にのみ生息しています。居醒の清水・加茂神社から西へ約 1km の間が「湧水の街道」で、とても趣があります。旧中山道の両脇には古い建物や種々のお店があつて楽しめます。なんと言っても湧水の流れの素晴らしいこと、バイカモが水中及び水面で咲きほこり、その陰に小魚の姿も見えます。西に向かうにつれて水量が増し、川には芋洗い器も見られ、川辺には食材を冷やす箱が自然ととけ込んでいくつも設置されていました。道から川辺に親しめる構造で、小さい子供は冷たい水に足をつけて大満足、ここを目当てに訪れる観光客も多いのですが、道端で地の野菜を売る人に超えかけられてゆったりとした時間が流れていました。



芋洗い機



梅花藻（バイカモ）

醒ヶ井養鱒場で、県職員の井出充彦さんから説明を受けました。滋賀県には琵琶湖を中心に漁業組合があまがありますが、養鱒場はそれらの漁業組合に稚魚を提供する任務を持っています。赤い色の線が特徴のニジマスは警戒心がうすく養殖に適しています。一方、大きく並んだ斑点が特徴の琵琶湖の固有種、ビワマスは警戒心が強くて養殖に適さなかったそうです。昭和 50 年ころからビワマスの個体差による選別育種を何代にもわたって繰り返し、警戒心が割合少なく、短時間で成魚になる種ができるようになったということです。30 年かかったそうです。琵琶湖ブランドとしてこれから県の養殖業者に提供していく予定です。ビワマスは焼いても寿司だねでもおいしいそうですが、なんといっても「おつくり」です、と井出さんは仰っていました。

醒ヶ井養鱒場の歴史は古く明治 11 年に設立、日本で最も歴史のあるマス類の増養殖施設のひとつ

です。今は人工飼料ですが、昭和の初期には生糸を取った後のカイコなどを使ってエサをやっていました。エサの大きさは成長に合わせて粒の大きさを調整します。水槽には他にも一緒にイワナやニジマス、アマゴ等が泳いでおり、鯉やチョウザメも見学者の目を引いています。魚の見分け方を習いました。ビワマスはイワナなどと違って溪流に上らず、秋に川の中流で産卵し、冬の間は底石の間に隠れるように過ごし、5、6月頃梅雨で増水した川の流れによって琵琶湖へ下ります。琵琶湖で3年から6年過ごした後川へ帰ってくるそうです。

アマゴは海に下り翌年の五月頃にサツキマスとなって川に戻ってきます。ヤマメは海に下りサクラマス、三月頃に川にもどります。中には海に下らないものがあるということです。海に下った方が大きく成長するそうです。ビワマスは15度あたりを好み、琵琶湖の北湖の中層におり、アユヤエビなどを食します。通常は成魚になるのに3年位かかりますが、養鱒場では1年半ほどで体長40cmまで大きくします。今の琵琶湖は30万年前にできて、それから固有種ができました。

稚魚を養殖池している上池（上流側）を囲いの外から見学しました。稚魚はウイルス性の病気に罹りやすく治療法がないため、職員が上池で仕事をする時は、足下を消毒をして、全身を作業着で覆うそうです。養殖場の水源は1km先の湧水で、水温は年間を通じて12℃です。辺りは木立に覆われ酷暑の市街地とは別世界です。見事な水量の湧水が何本もの川を模した養殖池に引き込まれています。養殖場のそばに立つ杉の幹にはヒゲのような地衣類「サルオガ」が生育しており、珍しい植物なのでここは滋賀県の保護地区になっています。成魚のいる下池は一般に解放されていました。釣り池もあって楽しいひとときが過ごせそうです。ますの餌を1パック50円で売っていました。

最近では自動えさやり器でエサをやっています。この日は別の行事の余録で採卵の現場を見ることができました。赤身を帯びた体長50cmほどのマスを網ですくい上げ、しっぽの方を機械に挟み、卵を手でしごき出すのです。手早い動作にシャッターチャンスがなかなかつかめません。魚を挟む機械が4台ほど並んでいました。卵はイクラと同じでした。人工授精の受精率は高いそうです。



採卵



稚魚養殖場

2. 伊吹の里薬草園

伊吹山は古来薬草の宝庫として知られ、平安時代には宮中に薬草が献上されました。牧野富三郎博士もよくこられたそうです。旧伊吹町では平成6年に「ジョウいぶき」が竣工され、その前庭に「薬草園」を開園しました。現在は米原市伊吹薬草の里文化センターとなっています。この薬草園には伊吹山の貴重な薬草を含む植物を栽培し、種の保存・育成を行い、薬草の知識の普及・啓発に努め、薬草活用で地域産業の振興を図ることを目的としています。ここでは現在絶滅危惧種を300種余栽培し

ています。

この季節、伊吹山頂付近は下界よりも7~8℃ほど温度が低く、山は花盛りの季節ですが、下の薬草園にとっては一番厳しい時期です。

シモツケソウをはじめ、オミナエシ、フジバカマ、ツリガネニンジン、セロリのニオイのするミヤマトウキ、トモエソウ、茎が潰け物になるサワアザミは大きな株、最近発見されたイブキヒメアザミ、アザミだけでもたくさんの種がありました。サラシナショウマ、ルリトラノオは伊吹山のみであり、エゾフウロウはここが南限でした。イブキジャコウソウの葉はえもいわれぬ匂いがします。

伊吹山は1250種以上の種が自然に自生して、薬草が多いのが特徴です。近江から宮廷へ献上した薬草は73種にのぼり、吉宗の時代に調査した記録があります。オオヨモギはモグサの原料、絶滅危惧種のタヌキマメはここでは繁殖していますが、山に種を蒔いても絶滅してしまうそうです。現在、伊吹山は植物採取は禁止されています。ここにあるオトコヨモギ、イヌヨモギなどの絶滅危惧種は、伊吹山と境を接する大阪セメントの保有地で取らせてもらっています。ユリ科で小振りな黒紫色の花を付けるシュロソウ、4年前に発見されたコワニグチソウ、風邪に効くと言われるイブキボウフウ、アザミの花そっくりのハムラソウ。オニユリとオニユリにそっくりでもムカゴの付かない小オニユリはユリ根が食べられます。ゲンノショウコは煎じる時間の長短で下痢止めになったり、下剤になったりします。トリカブトの根はアイヌの毒矢に使われる、カリヤスは黄色の染料になるなど、日差しのきつい中、熱心に説明される案内の方の豊富な知識といかにも薬草が愛おしいという態度に感銘を受けました。

この薬草園に環境省から人が来てこれら絶滅危惧種の記録をしています。だからといって育種の保存に対して、国から配慮や恩恵を受けているといったことはありません。国は種の保存に対してもっと積極的であってほしいものです。帰り際、ここに併設されている薬草湯に入って汗を流しました。



薬草園：シュロソウ



薬草園：説明を受ける